

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 永 澤 濟

本論文は、近代から現代にかけて日本語の漢語に起きた各種の変化を、大規模コーパス(1895-1928年刊の雑誌『太陽』)を利用して解析したものである。有意義な個別的事実を多く発掘するとともに、個別を超えて、原理的・体系的・全体的なレベルでも種々の興味深い考察を示している。

第1章で問題意識等に触れた後、第2・3章では、多くの漢語が近代と現代とで異なる品詞として機能する現象に注目し、その変化の実態と、変化を貫く傾向を明らかにする。具体的には、その多くは品詞の機能を狭める(一度多様な品詞として取り入れられたものが、例えば動詞機能を失って名詞専用になるなど、特定の品詞に限定される)方向の変化であることを示す。

第4章では漢語「-さ」形名詞の出現頻度の変化を、第5章では漢語の3種の連体修飾用法(「-の」、「-なる」、「-な」)の勢力分布の変化を、それぞれ観察する。その上で、「-さ」形名詞と「-な」形連体修飾の伸張期が重なること(1917-1925年頃)を見出し、この時期を、漢語が品詞表示マーカを伴わない形から、それを伴う形で使われるようになっていく移行期と位置づける。

第6章では、漢語副詞の文法的変化を伴う意味変化として、程度副詞化、文副詞化、否定文脈・疑問文脈への限定化が認められることを明らかにする。

第7章では、漢語動詞の「自他体系の変化」を扱う。近代語では現代語よりも自他両用に用いられる漢語動詞が多いことに留意し、個々の漢語動詞について精査すると、「近代語では自他両用、現代語では自動詞専用」の語は21語にのぼるのに対し、「近代語では自他両用、現代語では他動詞専用」の語は3語にとどまる。このことを観察した上で、こうした変化の発生と偏りの原因について解析し、「他動詞として存立するための条件」が、近代語に比して現代語では厳しくなったことを、より具体的に示す。

全篇を通して、近代から現代にかけて漢語の変化の諸相と、それを貫く「日本語の体系の中への漢語の定着」を描き出すことに成功している。個々の用例の精査と、大規模コーパスとを行き来することで、事実のマイクロ/マクロな把握とともに努め、従来は認識されずにきた種々の事実を新たに掘り起こしただけでも意義深い、マクロに捉えた事実につき、体系や変化傾向の観点からその変化が生じた要因をさらに原理的なレベルで解析している点も、先行研究に見られない著しい特徴である。具体的な解析も説得的かつ魅力的なものである。一部の解析や細部の表現につき、部分的に、審査員から他の提案が行われた点もあるが、本論文の価値を損なうものではない。

総合的に見て、目標設定・研究手法・事実観察のいずれについても、この領域に関する先行諸研究に見られない斬新さを具えた意欲的で優れた論文である。個別と原理との双方に目配りした点、大規模コーパスを有効に駆使した点は、この領域にとどまらず、広く言語研究の範たりうるものでもある。

以上により、審査委員会として、本論文を博士(文学)の学位に値するものと判断した。